佐佐木治綱著

歌集　秋を聴く

前田青邨装幀

長谷川書房

安田靫彦題簽

目次

一ふさの葡萄…………三　(1)
栗若葉…………五七　(16)
花馬酔木…………七九　(22)
白樺の幹…………九七　(26)
飛沫…………一二九　(34)
青葉…………一六五　(43)

あとがき…………一八八　(49)

＊転記者注記　( )内はワード文書内のページ

一ふさの葡萄

一ふさの葡萄

一ふさの葡萄手(た)握り冷たさに今朝の心の救はれてある

垣の邊のかげにむすべる朱(あか)き實を手折り來て置く朝のつくゑに

つぶらなる山牛蒡の實のくれなゐは朝餉の卓に息づけるらし

ほけて飛ぶ鐵道草の白き絮(わた)ゆふ闇のなかに心を曝(さ)らす

梢(うれ)はなれのぼるべくしてのぼりゆきし月は中空に澄みさだまれり

午前二時窓をあくれば谷遠(をち)の家も灯ともす靄にこもらひ

こほろぎも今宵はなかず秋の夜の深夜を覺めてうつつは白し

甲斐の秋

すぐ立(だ)ちの桑のみどりのあかるさに翳り移れる秋雲のかげ

山峡はただ霧の海ほつかりと木立浮びて山鳥のこゑ

夕しまく霧海のをちさやさやに上日川(かみみつがは)の鳴るにかあらむ

石はこぶ鐵に秋の陽はかげり踏みしだかれし曼珠沙華の花

秋の陽にもろ羽きらめき桑畑に沿へる鐵路に飛ぶ赤とんぼ

びようびようと霧ふきあぐる峠にして首虧け地藏に吾が遇ひにけり

甲斐源氏闘ひし溪夕しづむ山門に倚り懐(おもひ)はるけし

朝霧のながれ來(く)樅の木群道ほのかに光る水草(みくさ)のゆらぎ

秋深き野道をゆけば農人は栗笑む頃と云ひにけらずや

塩　原

ま青澄む秋空のもともみぢ葉の黝める朱(あけ)に置ける初雪

沈著(しづ)く葉の枯れ色めだつ岩床をさえさだまりて夕べ逝く水

岩床の鶺鴒遊ぶ夕峡のみどり幽けきに暫くを居る

さびた咲く夕戻り道淙々と激ち落つ水のさびしきこころ

挽　歌

昭和二十三年十月十日、母、熱海にて脳溢血にかかり、十九日世を去りぬ

いそぎいそぐ熱海の海の渚邊はささ波光(て)りて月のさやけさ

まさやかにみ眼はあきつつ吾等かくみ側にあるを知りもまさぬか

こんこんと心ねむります枕邊に目守(まも)りつつ聞く深夜(ふかよ)こほろぎ

火葬場にて

うすら日にみどりつめたき山蔭を母の棺のみ伴しのぼる

山峡に細くよごれし煙突のさむざむとしもたてりをるかも

見まもる竈の中は赤々と燃えさかりつつけ寒き炎

直土(ひたつち)に敷ける莚にならび坐しただに默(もだ)して兄弟(はらから)はをる

山峡の秋風さむき莚の上(へ)にかなしき時を待ちをるものか

山の際（ま）になづさひうすき一すぢの煙（けぶり）となりてゆ
きまししはや

谷あひの木群（こむら）が中にうすれゆく煙となれる母よ
母上よ

ほほゑみてみ靈よ聞かせ秋の日を今日もさやけ
く激つ水（み）の音（と）を

科研歌會

仕事着の若き學者は硝子破れ秋冷え著（しる）き實驗室
に

しづかなる知性のもとに澄み徹る歌あらむ吾は
そをひたに説く

會はてて酸素ボンベのくろきかかげ月夜に濡るる
鋪道を歸る

夜半

國文學史中世篇を書きつつ

幼な兒も乏しきに耐へて寢入りたる夜半に見つ
むる命かなしも

飢に堪へで鴨の河原に逝きし人世を如何に思ひ
逝きしにかあらむ

子が飼へる家鴨の聲は冬の夜の烈しき風に交ら
ひ聞ゆ

石南花

福島縣矢祭山にて

おり立てる驛はも小さく堤(どて)下り馬鈴薯の花の白き道ゆく

日に霧らふ朝川の傍(へ)にもやごもりほのかに白き栗の花かも

朝霧のなづさふ赤き岩崖はしづかに待てりみどりの風を

寂しらにかそかにおつる山かげの瀧に別れて山を下るも

瀧の邊のうすら日に照る石南花のつやつやし葉をまた何時か見む

もてなしのレタスの青さ露ながらみどりを食まむ心ゆたけく

奥多摩にて

人の世はさやぎこちたし霧しまく朝(あした)の峡に入りにけるかも

山峡は晝をしづかに岩窪の枯葉の翳の蟻と語るも

昨夕(よべ)の雨に洗はれ濕る草間ゆく生命(いのち)さ青き小さき蜥蜴

照りかげる溪そひ道にふむ草の時に光りて露のこまかさ

峡にそふ此の田舍家の柵内に子山羊が孤り夕べ
を鳴くも

草に木に人間(ひと)に暮るる日にかかはりなうひた逝
く水に今か別れむ

山紫陽花

下總なる椿一郎氏を訪ふ

野薔薇赤き門のかたはらの厩より栗毛の馬が首
伸べてゐる

ひたぶるに論文を書きし日頃へて此の友の家に
ひねもす寝(ぬ)るも

都居のひもじさに吾子と訪(おとな)ひて心憩ふもこの山
の家に

人げなき山かげに來て吾子と見るたわたわと咲
ける山紫陽花の花

星空に柿の葉の翳けざやかに木菟(みみづく)が音(ね)のさびし
きものを

古京の秋

窓の外の木末(こぬれ)流るる靄白き古京の秋のしづかな
る朝

幾歳を戀ひわたり來し美し(うま)國大和の秋の朝を目
覺めき

秋雨にしめりてたてる層々の端反(はぞり)を仰ぎ命かなしも（薬師寺東塔）

斑碧(むらあを)の甍は雨にさえざえと古へ人のこころたもてり

秋雨にけぶりしづもり物ふりし垂木のもとにわが默し佇つ

うつそみの嘆をいだき吾が仰ぐ塔は細雨に霑れしづもれり

埴土に根ばふ山茶花秋雨にま白くにほふ晝を閑(しづ)かに（唐招提寺）

夢殿はにほひ幽(かそ)けきみ佛の御(み)面を仰ぐわれ今日の日に（夢殿觀音）

堂ぬちのうすき光に寶珠持たすやさしき御手を仰ぎ息づく

薪能見終へて泥濘(ぬか)る途ゆけば夜空にしるき 塔(あららぎ) の翳

○

生活(たづき)のため書(ふみ)かく何の恥なると勵まさす言葉もだしつつ聴く

小諸城趾

おそ夏の城趾はかなしきらきらと穂薄ひかる道ゆきにつつ

赤松の幹あかあかと照るひまに流るる水は遙か
なるかも

まだら陽の散れる高萱わけくだる眼下(まな)にひろく
乾ける河原

ほろびたるものの杳け(はる)さみどり濃き木に籠り鳴
くひぐらしの聲

沓掛にて

朝をゆく谿川ぞひの道はぬめりもやごもり著(しる)き
白樺の幹

秋萩の山路をゆけば淺間嶺はむらさき邃きけぶ
り動かず

布佐にて

昭和十八年、疎開して千葉縣東葛飾郡布佐町なる齋藤氏の邸内
に寄寓す

沈み咲く山櫨子(さんざし)しろき窓の邊(へ)に戰果ききつつ虔
ましくをる

かぎろひの春さりくれば吾子と摘む堤(どて)の土筆の
青きかなしさ

ま白帆に大利根川をゆるらゆきし江戸人は世を
のどに思(も)ひけむ

幸綱、布佐町小學校に入學す

頭巾提げ藁草履はきて春の日を浴びつつひとり
吾子歸り來る

幼な日の懐ひ出とならむ頭巾さげ今朝も歩みゆ
く松並木道

水郷にて

夏光(かげ)に靡きあかるき早苗田にたまゆら映(うつ)るつば
くろの影

水郷の田舎家かこむ葦の間にまじらひゆるる山
吹の花

眞日照れる宮居に近き船着(つき)の眞菰にこもる葦切
の聲

晝湖(うみ)に潛き浮く鳰蒼ぐろき濡れ翅(は)に夏の陽のし
みらなる

野尻湖畔

湖(うみ)の上(へ)は燃ゆるがに赤き雲遊ぶ岸の夕闇に浮ぶ
白百合

疊の上に兜虫あそぶ朝の窓白樺ぬれて山の雨ふ
る

法師溫泉

溪川は嵐に濡るる岩くろく稻妻に光る士當(ししうど)歸の
薹

瀧水のおと遠ひびく山曲(くま)の龍膽の傍(へ)を赤とんぼ
飛ぶ

外（と）の溪の嵐に心亢（たか）ぶりつつランプの下（もと）に虻を殺すも

玉　川　に　て

聲あげて河石はふる兒の肌に搖（ゆら）ぎ映れる秋草のかげ

鰯雲のま白き見つつ仰ぎ臥す背（せな）に冷たき芋蔓の暈（かさ）

挽　歌

昭和二十年一月三日、外祖母八十六歳にて逝く

うつそみの喜びとはた悲しびのすべてを超えて笑みませる面

銀色の十字架を抜ける黒布（ぎぬ）のみ棺のまへに冬の夜ををる

一度（ひとたび）も叱られし記憶なき吾の御靈に今し永遠（とは）に別れむ

長病みに歪みし吾の心をもおだやかに見つついつくしみましつ

うら勁く面（おも）おだやかに笑みませるみ顔にしまた會はむすべなし

リオンに居てパリーをすらも訪はざりきとほほ笑ましつつ語り給ひし

二月二十五日、五十日祭の日大雪の中に大空襲あり

さんさんと雪降りしきり爆音に搖るる屋内（ぬち）に吾
等集へる

爆音も外（と）に降りしきる白雪も心ゆ離（か）れてしづか
なり吾ら

川　奈　に　て

すすみゆく船に寄り來る朝潮のうねりてつくる
清々し翳

挽　歌

義弟鈴木健治戰死す

ほがらかにつね語りゐし言（こと）のままに大洋（おほわた）の波に
まぎれけむかも

北海の藻草のなかの屍の寒くあらむと云ふ吾妹
はも

平　家　琵　琶

椿山荘に湯淺半月翁の琵琶を聴く

琵琶のしらべ八嶋の件（くだり）廣庭の雉子（きぎす）の影を眼に追
はずけり

上　越　行

バス曲り直下に白き夕靄の河原に黄なる月見草
の花

浴槽に聞え來（く）河鹿暮れよどむ河石の蔭に鳴くに
かあらむ

時じくにころろ澄み鳴く河鹿はも潺々（せんせん）と逝く瀬の音（と）にまぎれず

行燈の明りさゆらぐ浴槽に沈着（しづ）く石はもにぶみかげりつ

山の湯のランプは赤し佛印の友は今宵もペンとるらむか

石南花の葉並のみどり行燈に映ゆる傍（かた）へに旅の歌かく

山の際（ま）に著（しる）く眞白き夜霧はもうつそみの身の懐（おもひ）をさそふ

朝露の草ふみ見るも山峡をのぼり來（く）ももやの逞ましき白

石置ける板葺ぬるる山小舎のそがひの木木にこもり鳴く鳥

春の雨

昭和十八年四月、父肺炎を患ふ

リンゲルの痛みに耐へて春の夜の夜ふかき雨を聞きしむ父よ

リラの花ま白ににほふ枕邊に今し命とたたかふ父よ

牡丹花

朝露をふふみ牡丹花のたわたわと搖るる傍(かた)への
吾が心かも

○

岩肌にこびりつきたる牡蠣の殼動かずて遂に死
にゆくもあらむ

折にふれて

かそかなる身に歌創(つく)るさかし路人(みち)をうとみて籠
りゐる日々

國と共にい往く運命(さだめ)は青葉もる朝光(かげ)のもとに閑
かなるかも

炸裂する行爲のまへの瞑想に默示乞ふなるかな
しき人よ

銚子燈臺

あさ光(かげ)の濱邊に佇てばまろき石の乾けるに似し
わが心はも

夕かげる田の畔道にぽつねんと列車仰げる一頭(ひとつ)
斑ら牛

月かげは梢(うれ)に明るく暮れしづむ林に鳴ける懸巣
するどし

○

闘争の運命（さだめ）を負へる民族（うから）住む地球を語り懐ふ日多き

日本古典の理會觀照に先哲の理會觀照をなみするを得じ

はつ夏の空さえ澄めりいづへなき意慾に生きむかそけき吾の

瞬轉の人間（ひと）の世よそに照りまさる今宵の月夜（つくよ）蟲すだくなり

折にふれて

ものすべて心にひめてひた默す國內（くぬち）は觀つつかなしきろかも

世の何か歪めるか且つ匡さむと且つ悲しみて歌ふ吾等か

故宇野榮三君を懷ふ

牡丹散り棠棣花（はねず）は咲けどとこしへに竹柏園（なぎその）を訪ふ君にしあらず

あはあはと棠棣花は春の陽に咲くもそが傍（かたへ）にし佇つ君ならず

密林（ジャングル）のいづこ樹（こ）のもとに朽ちてあらむ君が遺しし五百餘首の歌

獨學に心鋭どかりし君なりき道の上に名を立てず逝きにし

槍

下總笹川なる旧家多田氏邸にて

氣吹舎（いぶきのや）の大人（うし）やどりしとふ舊き家の長押の上の
三本の槍

栗若葉

清津峡

眼下（まなした）は瑠璃邃く逝く深渓の此の釣橋を搖り渡り
ゆく

ひかりふる日照雨（そばへ）に赭き岩崖に血の色なせる紅
葉の搖（ゆら）ぎ

岩樹々のゆらげるひまの深渓にゆるら落ちゆく
紅葉の朽葉

月あかり光り濘（ぬか）れる峠道狐の鋭聲わが聞くもの
か

月の瀬

ふみ登る山路は梅樹（うめ）につづく梅樹（うめ）、朝を明るく
こもらふ光

あはあはと光あつめし枝透きて眞白逝く瀬の朝
ごころはも

渓をちの朝をみどりにさえ澄める丘見さけつつ
梅の樹に倚る

梅かをる山路は淺き春の土に生ふる土筆を見出
でつるかも

梅の影踏みつつゆけば淙々と激つ水の音（みと）の身に
ひびき來（く）も

當麻寺

大和路の麥生の道を往き往けば花明う見ゆ塔（あららぎ）が見ゆ

暮れなづむ花のかげなる山門は彼方に見えて埃道ゆく

春淺き夕べを白き築垣の苔にこもれる光（かげ）の幽（かそ）けさ

池の邊の馬醉木の色は夕しづみ苔ふむ吾（あ）の足の音（と）かそけき

淺春の金堂の扉（と）にいさよふ陽朱（ひあけ）に映えつつ古りにたる扉（と）よ

鳴り出でし鐘はおだひに鳴りわたり皇子眠ります短山（ひき）黝し（二上山）

河内弘川寺

徂（ゆ）く春の松かげ邃き石だたみ閑（しづ）けき寺を訪ひて來しかも

夕光（かげ）にさ搖（ゆる）ぎもせぬ木蓮の花しづかなる寺庭に佇つ

塚の邊（へ）に咲ける花美（くは）しその心歌の聖にささぐとならし

縁近く椿ま赤き書院にして讀みつぎゆくも似雲の歌書(うたぶみ)

吉野川

木蓮のかげに朝霧らふ長橋をゆるらに渡る吉野人かも

沈著(しづ)く石瑠璃にま澄みて逝く水はさ走る鮎を待つにかあらむ

九十九里濱

あぐり船くろみ並びてさやかにも波頭(ながしら)しろく響(とよ)み寄せ寄す

野尻湖畔にて

湖(うみ)靄の流れく朴の樹ごもりに茅蜩(ひぐらし)にまじる鶯のこゑ

湖(うみ)をちのみどり鮮(あた)らしき山並にかかりて著(しる)し二重なる虹

雨あとのみどり滴たる山並にかかれる虹を夕虹を見つ

みどり濃き丘と紺青の湖(みづうみ)の光(てり)をさめてま朱(あか)きヨツト

むらさきに夕づく山になづさへる綿雲の際(ま)に燒きつく夏陽

黒姫は焔なす雲にまもられてむらさき邃く暮れむとす今

栗若葉ほのぼの白き梢（うれ）すきて夕光（かげ）ふふみ鉛なす湖（うみ）

三つの山はろかにむかひもだしつつ湖（うみ）の意（こころ）は夕づきにたり

皎々と月照りさゆる湖ぞひの大杉の梢（うれ）のほの明りかも

湖（うみ）ぞひの壁に倚りつつ書（ふみ）讀めば膝に寄り來（く）る大き兜蟲

信濃なる淺間の嶺の夕がすむみどりの丘の白百合の花

湖（うみ）の意（こころ）わが心ともに閑（しづ）かなる朝餉の卓の桔梗（きちかう）の花

塩原

溪ぞひの岩山路（みち）は朝光（かげ）に水菜の露の淡くひかれる

山みちは槇の葉しげり常陰（とかげ）なる山窪に來て冷（ひえ）しるきかも

溪ひくく澄みなごみたる蒼淵にゆるら舞ひ落つ黄なる朴の葉

岩床をあした逝く瀬の傍(かたへ)へなる乾ける石に止れる蜻蛉(あきつ)

岩の上に飛沫(しぶき)に濡れて對ひ佇つ明るく勁くゆたかなる瀧に

明るくもさくなだり落つる瀧のもと飛沫(しぶき)に濡れて吾が佇ちつくす

瀧壺のうづまきが邊(へ)のひとところ霧に透きつつ眞日に明るき

とこしへにま白くおつるたに水の意(こころ)に觸れてさびしきものを

渓あひに夕陽あつめて葛の葉の風に搖れつつ翳の明るさ

岩魚釣りに行く途中豪雨に遇ふ

藁葺の軒をたぎち落つる雨簾たまゆら光り白き稲妻

赤倉にて

一もとの薄の光(かげ)とわが心とゆるがず秋の日は暮れまくす

永福門院の御歌の論考を書きつつ

中つ世の優(やさ)しきみ歌究めむと秋のなが夜を筆とりすすむる

讀みつげるみ歌ゆ離(か)れて聴きすます蟋蟀の音の
澄みてしづけき

秋の夜をかなしみて讀む人の世をかなしみにつ
つ詠みましし歌

花馬酔木

法隆寺

斑鳩の皇子の魂ごもる 塔（あららぎ） は星ふる空に粛（しづ）かなるかも

月光（かげ）に曝（さ）れ白き扉（と）に倚りつつも吾はあひがたし飛鳥の代人に

星空に浮べる塔のしづかなる 精神（こころ） に觸りて去りあへぬかも

花馬酔木

傘さして目守（まも）れば白き花馬酔木この春雨に濡れて光れる

ま白花みどり葉むれてこんもりと此の春雨に濡れて閑（しづ）かさ

淺芽生に生ふるこの花はる雨（さめ）に光は保（も）たず著（しる）きま白さ

さびしきは吾（あ）のみにあらず春の雨にしづもり默（もだ）し咲く花あしび

花翳の暗處（くらど）占めつつみどり葉のしつとりと濡れて層（かさ）なり合へる

ぬれひかりしづもり咲ける花あしび夕光(かげ)の中にしづかに濡るる

闘へる國にしてここに花あしび霑(ぬ)れつつさくを見てをり吾は

武藏野

葱畑の葱ほのぼのとぬれ光り武藏野の春は雨しづかなる

田舍家の軒さきの藤あはあはと今日の春雨に光ふふめり

蠟燭をかざせば黝き翳うごくみ佛の背が黒き御厨子に

折にふれて

吾は世をかく信ずとし云ふ人の言に服して過す日多き

闘爭の世なれど眞理(まこと)究めゆく人をしづかに老いしめ給へ

袋田瀧

陽に赭く濕りま廣き岩肌を渡る鴉の影黝くうつる

四段(きだ)なす岩床夏の陽に曝(さ)れて苔の斑(まだ)らにぬれてま青き

苔あをき岩肌ぬらし盛上(もりあが)り夏陽ふくみて激ち逝く水

枝間透き瀧白う見え大欅葉うら層(かさ)なり蔭のうご
ける

伏見天皇御製を拝誦しつつ

民をおぼし花鳥を詠(うた)ひ珠玉(たま)なせるみ歌かしこみ
今日も昨日も

ひさめ

を止みなき急雨(ひさめ)にきそふ蟲の音の今宵を寝(い)ねて
明日生きむとす

吾子

朝光(かげ)にしろき令法(りやうぶ)の花蔭を驅(かけ)り來る子に思ふこ
となき（高原にて）

さ庭べに落葉積み焚き紅き焔(ひ)を吾子と見てゐる
朝の一とき

燈(ひ)暗くし赤き自動車走らせつ妻とあやせば笑顔
する吾子

鎌倉にて

朝日うけうすむらさきにちらばれる海草ふみて
吾子とゆく濱

冬の陽は硝子一ぱいにま明るくロビーの籠の黄
なるカナリヤ

親と子がたまさか對ふ此の晝餉卓の上なるフリ
ージアの花

身邊雜唱

生を死を衷(うち)に怺(こら)へて堪ふる日は幻覺を離(か)れて生くると云ふや

氣吹舍(いぶきのや)集を移岳集を見よ蒼古なる調(しらべ)は生活(たづき)のため息ならず

冬の月馬醉木木群(こむら)の上に流れするどくさゆる今宵の心

うばたまの深夜(ふかよ)を孤(ひと)りもの思(も)へば外(と)に荒き風も昵(ちか)く親しき

九品佛

山門の柱のかげの花明るくこれのみ寺の閑けき眞ひる

白樺の幹

上高地にて

岩間透く白き朝光（かげ）を岩にすがり喘ぎつつ見るましろ朝かげ

踏みためす岩盤（どこ）の岩ずとすべりとどろとどろと鳴り落つるかも

うつせみのこころはかなし澄み徹る瀬に向ひつつなぐさむべきに

むらさきに煙吐く山の山裾はほのぼの澄めり瀬も河石も

おのれ吐くけぶりはうすれ紫に人の世の吾にかかはりもなし

日日を吐くけぶりの色のかくばかりゆたにさえたる山に對へり

雨あがり湖（うみ）になづさふしろきもやひとり遊べりそのうすき靄

詩仙堂閑日

秋が來て閑（ひま）なるコック裏庭に白樺割りて薪（まき）つくりゐる

幽（かそ）かなる添水（そうづ）の音に呆（ほ）けつつも心足らはぬ日のなかりしか

戰馬御する節太（ふしぶと）の掌（て）に握るには如意ものたらず思はざりしや

鷹のごとするどき眼もて眺めけむ庭水はただにさやけく流る

敵の首引き抜く時を笑（ゑみ）ふふみしそが面わにて彫りし如意かも

炎なす猛き心も時に遇はず此處に住みつき見けむ庭かも

庭石における青苔時をりは秋陽のもとにきらりと光る

人の世にすね者とこそ云はれしかしづかなる家に住（すま）ひつる人

彼が世にも大木が梢（うれ）の葉末にし誇らしげなる蓑蟲見けむ

元政上人の庵を訪ふ

み讀經の讀（よみ）の疲れに庭に出で佇たしし石か秋陽にほへる

丈山の猛き姿も笑み見つつ薄芒（すすき）の庵にいましつる君

神の答

正しきはうつそみの世に苦しみつついや正しくし生くべきものか

身をひしぐ神の笞(しもと)のはげしともこころ虔(つつ)しみ受
けてし生きむ

苦しみはそを踏みしだき進むべく神より賜ふ試
煉と思はむ

雪山

かなし吾雪山に來てふり積める淨き雪とし異(こと)ご
ころ持つ

雪國はなべて明るし朝日うけて光るつららも樂
しげに見ゆ

軒つたふ雪どけのおともしづかなる雪國の夜を
孤り覺めをり

雪の丘に白く夕づく日を見つつすべなし吾の心
たらはず

ゲレンデの貌(すがた)こころにゑがきつつ綿のごと吾の
疲れて寢(い)ねき

樫の實

かしの實の一つの道を守るべく心の底に誓ふ思
あり

法隆寺小吟

とほどほし世とし云へど凜々と胸にせまり來(く)
ゆたかなるもの

大いなる救世(ぐぜ)のみ誓はかすかなる吾等が胸の永久(とは)のともしび

青空に浮ぶ端反(はぞり)の色錆びて救はれし心に仰ぎつつをり

初秋斷想

人の世はさわがしといへさ庭べの蟲の音は聞くにゆたけくありけり

谿・海・人

下り來し山道ひらけ秋の陽は欅の梢(うれ)にしじに明しも

鋸をひく音谿あひにほの響き閑(しづ)けき業としまし見てをり

草崖の松蟲草の濕りつつ光りともしき濃むらさきなる

久に來つる仙石原の山なみは夕闇ふかく星の明るさ

生業(なりはひ)に出づる舟かもいさぎよき朝日充ち滿つ潮(しほ)こえゆくも

公孫樹落葉

歩みゆけば山門の屋根眼に迫り冬明き空を著(しる)く退(しぞ)けつ(九品佛)

山門に續く敷石の凍（い）て堅く仁王の朱（あけ）の色寒う見
ゆ

公孫樹落葉冬の日を受けて一ところ黃ばみ色濃
くしづもりゐるも

やや遠き公孫樹の枝に冬陽さし根もとの落葉ひ
かり明るき

黃に映ゆる落葉が中に落實拾ふ子のエプロンに
明し冬の陽

冬陽さす落葉かき分け子らは拾ふ銀杏の實の黃
のつぶら實を

黃に映ゆる落葉踏みつつこころ孀（づま）透（す）きとほる葉
を拾ひけるかも

深大寺歸途

冬空に光著（かげしる）き月小田の面（も）にさやに映れる欅の小
枝

日くらく風とみに起り竹林ひかりくるめきすぢ
りもぢりをる

モルドウ

七月中旬、プロムナード・コンサートに於いて、スメタナのモルドウ（わが祖國より）を聽く
モルドウ（チエコを流るる河）は、スメタナの晩年に作れる祖國愛に燃えたる傑作

彼が國チェコを讃へし旋律は夜霧の翳を透きわ
たるかも

耳はしひ心はた癡(し)ひし苦びに耐へてを生みしこの旋律を

青葉かげま白に激つ河の面(も)を眼に描きつつ風のすがしも

高原吟

朝靄に落葉松の葉の露じめり吾ひとりなり落葉松の道に

山の際(ま)は日照雨(そばへ)の晴れて瑠璃色に澄みなごみつつ雲走る見ゆ

岨みちは芝草ぬれてつめたしもきびしく黄なる奈手之古の花

暮れなづみ山影うつる溪水の音を清(さや)けみひたに響(とよ)める

たかまれる岩にあたりて激つ水は月の明りに曝(さ)れ白く見ゆ

幸綱誕生

中秋の朝、幸綱生る。七夜の宵に

窗ゆ入るさやけき月の光うけて吾子(あこ)はしづかに眠りてあらずや

秋空の澄み照る月のいや清(さや)に心ゆたかに生ひ立てよ吾子

幸綱に

淡雪　ほどろほどろに　零り敷く　立春の宵　人の世は　寂しきものを　暖たけく　犬張子に　物いふ吾子の　健やけく生ひ立たむは　親われの　切(せち)なる祈　汝(な)が宮詣の日　初對面せし　汝が外曾祖父　明治の初め　黎明期の　化學の道に　身を捧げし　汝が外曾祖父は　櫻咲く春をし待たで　今日の如　寒き夕べ　忽然と逝きましてより　今日は九日　汝が世に生れ來しも　尊き神の使命(よさし)あらむ　そを己(し)が身に生かし　甲斐ある一世　送らむ事　親なる吾の切なる願　學びの道は孤獨の道と　ゲーテは言ひぬ　八衢の　いづれの道　汝が選ぶとも　正しく直く明く　ひたにしあゆめ　己が大道を　窗ゆ入る　雪の朝明(あさけ)の　陽ざしあかるく　汝が顔映えて　丹の頬(ほ)赫らめ　熟寢(うまい)する　吾子に寄り添ひ　淺月の幽かなる　汝が眉を　萱の根の　ねもころ見つつ　親なる吾は　この願ひごと　汝(なれ)に與ふも

折にふれて

奔る駒止めむ術なしといふ人に物は言はずてわれ別れけり

ひとり笑む若子を見守り居たりけり父に生命の道歩ましめ

五尺の身みなこれ膽とはばからず謂ひ得し性(さが)の羨(とも)しきろかも（平田篤胤）

悲しきは世の道理（ことわり）とわななけば夜の目に痛し壺
の白百合

山の常陰

あしひきの山の常陰（とかげ）にこもらひて響（とよ）める水のし
づかに白し

山高み下ゆく水のしたにのみ在り經る生命（いのち）死な
しむなゆめ

吾等の祖先（おや）

幽玄も寂（さび）も民族（うから）の性質（さが）なれど吾等が祖先（おや）は直く
清かりき

曼珠沙華

秋草のみどりに交り曼珠沙華ひるの日光（かげ）に紅し
とも紅き

秋陽照る河をち土手に悠悠とむっつりとして草
食める牛

飛沫

北海道スキー行

驛まへの廣場の雪にネオン映り鎖（チエーン）つけし自動車（くるま）
走せ來（き）走せ去る（函館）

窓下の湖岸（うみぎし）は雪に暮れなづみ船着（ふなつき）に近く鴉むれ
をり

昨日（きそ）のぼりし人の走痕（シユプール）かただ一つ山壁につづく
光をきざみ

朝日きらふ眞白山壁すべりゆけばスキーに觸る
る石南花の枝

霧華もたる樺の根もとゆ風のまにま粉（こ）雪はけぶ
る光となりて

朝（あした）とき白樺（しらかんば）の林、日さし入り光きはだつ走痕（シユプール）
の線

馬橇行

一月五日、上川より層雲峡に馬橇を驅る。兵士二人、同行の友人と
四人なり。途中大吹雪に遇ひ、日歿して漸く着す

莚しける馬橇の床にゆられつつちぢかむ手もて
とり出す摶飯（むすび）

神居古潭(かむゐこたん)にて汽車遅延せしとふ兵士ら乗る吾等
二人乗れる小さき馬橇に

大き鈴くびにかけしまま疲れきれる馬は糧食(は)む
吹雪の中に

橇のなか毛布かさね被(かぶ)り無言なり今はすべてを
馬橇に托す

橇、ふきつける雪の中を走る、雪の中に白く照ら
ふ眞日に向ひ走る

眼(まなこ)とぢ、橇底にきしむ雪の音、橇馬の鈴の音(ね)を
聞く、ただに

丘のくぼみ雪だまり深く橇馬のもがきもがけど
すべり脱け得ず

腹下まで雪にうまりて馬追が馬をはげます吹雪
の中に

狂ふがごともがく橇馬の立髪は雪ぐるる道に黒
く波立つ

暮せまる曠野雪空にすみ透(とほ)り可愛(かな)しき馬の首の
鈴の音(ね)

夕やみの蝦夷松が枝透(えす)きかなたには宿の燈(ひ)赤し
馬驅けいでつ

萬法院禪林寺

四月上旬、初春の當麻寺に詣で、中之坊の侍者の間に宿る。
翌朝、石州の庭、東塔、曼陀羅堂を見る。

天平の桝木の臺の燭がてらす高坏（たかつき）の上の黄なる京菓子（鷺の間）

ねもころなる精進の膳の二の膳の赤き塗繪が燭に明（あか）しも

燭の光精進の膳にほの明（あか）む薯蕷（とろろ）を巻ける細きのり巻

ほとほとと筧がおとす水の音（と）の耳底にひびき夜は更けにたり

寢（い）ね足らひ心やすけく廊に坐す低築垣の垣下（かいもと）の苔（石州の庭）

咲きさかるしだり櫻の枝すきて曇り日に浮ぶ塔（あららぎ）の線

花曇り塔の端反（はぞり）の風鐸の小（ち）さく重たき憂に似たり

しだり櫻ひろごれる枝に花みてり纖細なる塔の線をそがひに

白鳳の塔の肘木のもとに來て朱塗の剥（はが）れ仰ぎ見にけり（東塔）

僧のともす燭の火厨子にほの明り古りし螺鈿の
しづめる光(曼陀羅堂)

堂のうち丹塗ふりたる圓柱むかし人が書きし樂
書を讀む

藥師寺追儺式

池のあなた木の間透き進む提灯の池の面に赤う
映り映らず

人ごみに押されつつ入る堂内の古りよごれたる
高き闌木

僧が撒く散華の瓣はひらひらと燭ほの暗き廻廊
に舞ふ

篝持ちきほへる赤鬼佇ちどまり面がたはづし汗
ふいてゐる

室生寺

雨あがり濕れる石のきだはしにかげ映す梅の見
のあたたかさ

塔のうしろみどり深々し杉の間を走りうすれゆ
く白き夕靄

伊豆韮山

江川太郎左衞門旧邸

白壁にうつる青桐の蔭うごかずなにか日中を闌
くるものあり

籔道を坦庵の墓碑たづね來て籔蚊の多きに驚きにけり

慧敏坦庵は青年吾等の師表なりと考へつつ蚊腫(ば)れの腕をさすりたり

追分油屋にて

厚板を彫り透かしたる塗欄間ながめつつ朝を起き惜しみをり

山つばめ軒下に飛び揚羽蝶(あげは)まひ古驛(こえき)の朝は曇り空なる

箱根の夏

しつとりと朝露ねばる馬醉木(あしび)の葉肩にさやるを登りゆく、ただに（神山に登る）

目路はろかしじに入りくむ渚邊にしろく音なく寄り寄る波の秀(ほ)（頂上）

小瀬溫泉某邸前庭即景

樋(ひ)にかかる筧がおとす水の音(と)の此の山窪にただにしづかなり

じつとりと桶に生えたる青苔の雫ひかりつつかもす閑(しづ)かさ

眞日ひかる薄(すすき)わけ走る溪水は蜻蛉(あきつ)の影をうつし映さず

渓のま中肌理（きめ）こまかなる川石を縞なしてぬらしこゆる水あり

岩に生ふる紫苑細花（しをんこまばな）渓水に靡き揺れつつ瓣を落さず

木洩れ日のまばらに明（あか）き下つ枝（え）の若葉食む山羊光をも食む

紅葉の塩原

岩床にひろごる夕瀬たかまれる襞によりつつ瑠璃にあわだつ

夕陽昃（かげ）る岩床にをどる波白うたまたま交（まじ）り散り舞ふ紅葉

山峡のもみぢ散る岩にあたる瀬のしぶきがつくるたまゆらの虹

岩の上（へ）に飛沫（しぶき）がつくる虹みつつ現（うつつ）なかりし身體（み）が冷えて來（く）る

水底まで秋陽さし明（あか）る瀧つぼに紅葉がをどる色かへにつつ

秋闌けし陽は透きとほり濃き紅葉うすき紅葉がをどる瀧つぼ

夕日昃り瀬の岩床にをどりつつよぢれ舞ひつつ飛びとぶ紅葉

高崖（ぎし）の紅葉がつつむ岩肌に夕さえの凝り見つつ
寒けき

山峡の夕陽とどかぬ岩さむく窪（くぼみ）の水に紅葉しづ
めり

浴槽（ゆぶね）のそば朝を澄む瀬の水底の小石の上を流れ
ゆく紅葉

指の間に紅葉つまぐり朝浴槽ぬれつつ荒きこの
觸覺を

旅日記より

草がれの山寺の冬をさびしみか縁先に僧は話し
つづくる（某　寺）

春の日の新薬師寺の築垣に牛がおとしゆくあた
たかき影（新薬師寺）

幾世の僧こころうちふるひ登りけむ戒壇にいま
夕陽ぬくめる（東大寺戒壇院）

塵しろき蓮座に近う吾（われ）今し天平の世のみ佛に觸
れつ

吉野川に臨める阪本氏邸にて

窓ごしの木蓮の葉に靄しろく朝を澄む瀬に光れ
る小石

うす靄の中をゆるらに浮び來（く）る筏朝光（かげ）にぬれて
光れる

偶感

人の世ははかなし垣につむ雪のしろきを見つつ
なぐさまむとす

窓の隈にふぶき積む雪み呆（ほ）けつつ吾が思ふこと
なしと云はなくに

久松博士歸朝せらる

山窪の夕光（かげ）にをれば鵯鳥の聲かぎり鳴く靜寂（しじま）に
徹り

あきらけく國のすがたを外國（とつくに）にまさやかに觀て
君歸りましつ

恩師石井直三郎先生を偲ぶ

夏のよひ病の草子繰りひろげゐみつつ說かしし
師の面わ見ゆ

こころ

神はそも人のすがたを人に見せ苦しめて人を鍛
ふるものか

苦しくも神の示します吾が姿眼（まなこ）も口も持たざる
かと思（も）ふ

身のすがたこころに見つつ悲しかりさばれ悲し
みにとどまるべからず

ひしがるるはたてゆ浮ぶますらをの怒り心（ごころ）をた
だし磨かむ

かしこくも賜へる試煉眼（まなこ）すゑ貌（すがた）みきはめてたた
き毀たむ

生の緒は神の賜ふもの身をきざむ苦しみもまた
神の賜ふもの

昇仙峡

黒と黄によぢれ陰影（かげ）もつ崖の岩なにか獣の貌（かたち）と
し見ゆ

岩の間を滾（たぎ）つ瀬の水に眼（まなこ）凝らし澄みて異なる色
見分けをり

高崖にぽつり生ひたる小松群、枝ゆれをるは風
あるらしも

山居雨後

山裾にたつ虹を透きて群生ふる欅の幹の濡れの
明るさ

露ひかる青芝におとす石櫧（いちひ）の濃き影吸ふがにも
舞ふ黄なる蝶

青葉

穂高に登る

七月中旬、豪雨の後の穂高嶽に登る。
登山道崩潰し、困難をきはむ。

靄ごもる岩間攀ぢ攀づと偃松（はひまつ）の根にゆだねたり生（いき）の命を

雨あとの濕れる岩を腹ばひつつのぼる鼻さきの深山銀ぽうげ

雄にそひて遊べる雌の雷鳥の頭（かしら）はあかし地もやの間（あひ）に

崖に沿ひ足ふみしめてあやぶみつつ降る傍（かたへ）の黄なる石南花

友默（もだ）し吾（われ）はた默（もだ）し踏みためす岩また岩に身も心もつかれ

上高地にて

溪のながれ雨にするどく鳴るなべに時鳥は鳴く樅の木がくり

さえしろき白樺の幹の枝の間（ま）に朝をほのゆらぐ焼嶽のけぶり

近づけど放牧の牛みじろがず朝雨にぬれて艶よき毛並

上高地より平湯へ

穂高登攀を終へ、上高地にて一行と別れ、單身豪雨の中を安房峠を越え平湯に向ふ。暴風の後とて道路崩壊し、道に迷ふ。夜に入りて漸く平湯に着く

頭上をうつ雨水しげし凸凹の壁の濕りにかかれ
るカンテラ

亂れ咲ける谷の斜面(なぞへ)のがくの花白き蕊をつつむ
白き夕靄

崖下の瀬々にあがるしぶき白し白し夕闇のうち
に生けるがに見ゆ

飛び下(お)りし笹葉おほへる中にふと草鞋の足跡(あと)を
見出でたり、道

つかれし身をじつとしづむる湯ぶねの外(そと)一つ螢
とぶかつ消えにつつ

かつ消ゆる螢火におもふ山越(やまごえ)にあやまたば既に
消えもしけむ生命(いのち)

おそき夕餉、黒塗の膳の色鄙さび飛騨の平湯の
夜は更けにたり

法師溫泉

庭さきの小川さらさらと鳴るなべに河鹿の聲の
青葉に徹る

拾ひあげし小石のほてり掌(たなそこ)にもちて思(も)ふ今日を
偲ぶ日もあらむ

赤澤の林道を越す青葉道つひに見いでつ人住む家を

山の道里近くなりてたまたま逢ふもんぺはける子瘦せし白山羊

秋の神津牧場

信濃神津牧場に遊ぶ。その夜、中秋明月なり

膝の上に首もたせ來（く）るコリー犬の毛並ふさやかに體（たい）のぬくとさ

寄りそひ來るコリーの毛並なでやりつつ濃くあたたかきミルク味はふ

柵の内ゆ首さしのべて黑き牛の藁食（は）み、晝を音のかそけさ

太き腹に首おしくるめ牛は寢をり人間などにかかはりもなく

高原の秋のま晝日牛の背にわが背にうけてものうく樂し

植ゑ並（な）めしもろこし畑の果（はて）ほのに明るうなれり月出づるならむ

皎々たる月光に明き小舍のまへ泥濘（ぬかるみ）に深し牛草鞋のあと

中秋のこの明月をみすずかる信濃の國に吾が見るものか

しらじらと光るは牛の背にあらじか月おし照れる岡の斜面（なぞへ）に

さやさやに渡る高原の夜風うけ光る牧草よ牛に食はるる

己（し）が役目終へし夜ふけの犬小舎にコリーは眠る月のさやけさ

たらたらとたらす涎の陽に霧（き）らひねむげに吾を見守れる牛

大き乳房ゆらゆらとさせものうげに眼蓋（まぶた）ひらきて又つぶりたり

朝食のミルクスープを飲みつつ見る窓の外（と）に黒う光る牛の背

日さし入り明るき小舎ぬち牧人に悠々と牛は乳しぼらする

奥日光遊藻

草がれの戰場が原、秋の日を負ひつつぞ來（こ）し語る人もなく

ほのぼのと湯氣立つ湖（うみ）の岸につなぐ小舟がおとす影のさやけさ（湯元）

ハイカーの踏みよごしたる雪かたく色うつろひし落葉いだける（金精峠）

目の前の落葉松の枝さゆらがず、くぎられ見ゆる湖浪（うみなみ）の照（てり）（湯の湖を望む）

雲の影くぎられ映る碧く澄み光をたもつ繁藻が中に（菅沼）

養魚の群をどるにかあらむ水の面（も）のゆれゆれて月の形を亂す（丸沼ホテル養魚池）

水にとほる秋の日ざしを背すぢに受けあつまり散り亦あつまれる魚

干茸（ほしきのこ）かさねて絲に貫（ぬ）き垂るる影の明るき田舎家の障子

五色溫泉スキー行

しらじらと湯の氣こもれる浴槽（ゆぶね）にして夕べをひたる外（と）は大吹雪

雪帶びて楢の林をよぎる風谷間にこもる雪をふき上ぐ

尊きかもきよらなるかも大日輪滿山の雪に照りかがよへり

雪山にかがよふあさ日かくのごとき美しさあり人間の世に

大學雜詠

講堂のかげなほ消えのこるいささかの雪ふみしだき遊べる小鳩

雪ばれの朝の鋪道の水たまりさかしまにうつる
公孫樹のさ枝

冬の雨に午後はや暗き廊下の隅しづかに立てり
ルイ・パストウルの像（圖書館）

孝標の女筆とりし日も今日のごと粉雪ちりぼふ
朝はありしや（「夜半の寝ざめ」試験）

母とその孫と

長閑なる四月の日　小雨けぶる午後　祖母の祝
につどへる　十まり五人の孫　寫眞うつすと
あるは母に抱かれ　あるは従兄どち手をひきつ
つ　あるはからくも獨り歩みつ　一室に二列に
並ぶ　小學にゆけるは腰かけ　前なるはすわれ
る　足投げ出だせる　唯一人うしろより母がこ
ごみてつかまへたるは　何ゆゑと知らずて脇を
向き　鳩が出ます出ますと　寫眞師にいはれて
つぶらなる眼みはる　幼きどちの思ひ出となら
む　今日の寫眞　おのがじし健かに　良き人と
しなれ　ほほゑめる祖母の　ひたぶるの願なら
む　そは

あとがき

「秋を聽く」は、私の處女歌集である。

高等學校時代に病氣に罹つて、大學を出るまでの私の生活は、常に外祖母と父母との厚い恩愛のもとにありながらも、心寂しいものであつた。

それから今は十數年になるが、此の歌集の作品は、その頃からのものを、ほぼ逆年順にあつめたのである。

八人兄弟の末つ子として、周圍のあたたかい愛情のうちに成長し、時に自分には自分なりの精神上の動搖はあつたものの、内面的に人生に對する探求の淺かつた自分の作品が、深く自己を掘り下げ、人生を觀照する深みを持つてゐないことを恥かしく思ふ。しかし、いま過去の作品を一卷に纏めてみると、自分には懷かしい生活の記錄である。

三つの學校の講壇に立ち、かたはら、東洋學を志してはるばる海を越え來つた熱心な青年、その他の人に國文を敎へつつ、その間に原稿を書いて、夫婦と子供一人とのささやかな家庭をかつがつ維持してゐる現在となつて、私には、やつと生活の眞の味はひがわかつて來たやうな氣がする。しかしてまた、ここ數年、科學研究所の若い人人や、同人の作歌を指導してゐる間に、自分の短歌に對する考も相當に變つて來、祖國が困難な再建の途をたどつてゐる今日、將來の短歌が如何にあるべきかに就いても若干の考を懷いてゐる。しかし、これ等はすべて私の今後の精進によつて作品に實現して往かねばならないことである。

過去の習作なるこの「秋を聽く」を今公けにするにつけて、この歌集を、私の生活の全面的な庇護者であつた今は亡き外祖母と母との前にささげたいと思ふ。

なほ、稿をまとめるに當つて、種々の助言を與へられた小城正雄氏、林大氏、中山昭彦氏、栗原潔子氏、遠山光榮氏、その他、同人の方々に厚く感謝する。

昭和二十五年十一月

佐佐木治綱

略歴

明治四十二年二月二十日生。
昭和十一年三月東京帝國大學文學部心理學科卒業。同十六年同大學同學部國文學科卒業。
昭和十五年二月より十九年二月まで歌誌「鶯」主宰。
同十九年四月より歌誌「心の花」編輯同人。
同二十五年三月より歌誌「短歌風光」編輯同人。
實踐女子専門學校、帝國女子専門學校、跡見女子學園専攻科、講師を經て、現在白百合女子専門學校並に同短期大學教授、跡見女子短期大學講師。

著作目録

短歌鑑賞の心理	昭和十一年十月刊	人文書院
平田篤胤歌文集	同　十六年四月刊	富山房
永福門院	同　十八年五月刊	生活社
伏見天皇御製の研究	同　十八年十一月刊	人文書院
万葉集選	同　二十五年二月刊	文京書院
歌集　秋を聴く	同　二十六年三月刊	長谷川書房

昭和二十六年三月二十日印刷
昭和二十六年三月廿五日發行

定價　參百圓

版權所有

著者　佐佐木治綱
發行者　大久保秀房
印刷者　大久保秀房

發行所　長谷川書房
東京都台東區西町八番地
電話下谷(83)四七九三番
振替東京四〇七六一番

＊転記者注記

以下の旧漢字については、元本からの完全一致が叶いませんでした。
「二点しんにょう」を用いてある「しんにょう」の文字。

朝・空・前・斐・海・曼・花・雪・伴・煙・突・寒・硝・飢・食・冬・半・摩・層・音
終・飾・内・浴・郷・船・浮・畔・虔・祖・潮・平・浴・宵・隧・扉・咲・急・節・者
著・起・響・祈・術・交・鎖・船・精・僧・彫・苑・舞・感・磨・彦・梢・嘆・翁・遂
聖・菜・割・送・梅・慧・渚・尊・崩・祝・消・終・乳・抱・歩・周・情・婦・習・社
房・所

＊転記者注・歌数

全四〇五首（短歌　四〇四首、長歌　二首）

一ふさの葡萄　・・・（一二九首）　栗　若　葉　・・・（四八首）
花　馬　酔　木　・・・（三二首）　白　樺　の　幹　・・・（六四首）
飛　　　沫　・・・（八一首）　青　　　葉　・・・（五〇首）